

博士学位論文審査要旨

2009年1月20日

論文題目：アドルフ・フォン・ハルナック『キリスト教の本質』における「神の国」
理解

学位申請者：加納 和寛

審査委員：

主査：神学研究科 教授 水谷 誠

副査：神学研究科 教授 森 孝一

副査：神学研究科 教授 原 誠

要 旨：

本論文は、19世紀から20世紀の転換期、ドイツ第二帝政からワイマール共和国にいたる時期に活潑な活動を展開したプロテスタント歴史神学者、アドルフ・フォン・ハルナック(1851-1930)における神の国概念を探求しようとするものである。主たるテキストは、ハルナックの神の国思想が率直に現れており、20世紀前半に最も良く読まれたキリスト教的、神学的著作『キリスト教の本質』(1900年)である。

序章では、ヨーロッパと日本におけるハルナック受容史を概観し、また論文構成と方法上の視点を定める。ハルナックは、ベルリン大学教授としてキリスト教教義史研究に大きな足跡を残し、またヴィルヘルム皇帝協会総裁として、プロイセンならびにドイツ帝国の文教政策にその影響力を発揮した当時のドイツ・アカデミーを代表する存在であった。また福音主義社会会議議長として学術的視点から長年にわたって当時の社会状況にコミットする姿勢を堅持した。本論文の特徴は、彼の「神の国」思想の道備えを、19世紀中葉のドイツ社会とそこに現れた神学的努力としてのアルブレヒト・リッチュルの思想に求め、後代にこの思想がもたらした神の国解釈をめぐる緊張をカール・バルトに事例を求めて解明するだけでなく、それぞれの時代の社会的背景、政治、文化的視点を斟酌して書齋のみに留まらなかったハルナックの神の国思想を総合的に探求するところにある。

第一章では、ハルナックの生涯を概括し、『キリスト教の本質』にいたるまでの思想的神学的道程を明らかにする。また、19世紀ドイツの社会、政治、思想を歴史的に瞥見し、ハルナックの活動の一般的背景を描写する。さらに、19世紀に理論的にも実践的にも活潑な展開を見せた神の国思想とその傾向に棹さず代表的な事例を案内する。

第二章では、ハルナックの師であり、19世紀中葉に、この世におけるキリスト教的倫理的共同体に軸足を置く神の国理論を展開したアルブレヒト・リッチュル(1822-1889)を扱う。このリッチュルの思想は、この世界における倫理的共同体と超越的・天的な神の国思想との緊張、また教義学的諸主題(創造論、キリスト論)との関係、教会と国家との関係を扱って具体的に明らかにされている。そして、このリッチュルを継承する側面と批判的に距離を置き独自の構想を見せる側面、ハルナックの神の国思想の彼我に共通する点と相違する点を浮き彫りにすることでハルナック神学の基本的な特徴を探る。

第三章は、『キリスト教の本質』における神の国理解の批判的分析である。この著作は1950年以降4度(ブルトマン、トリルハース、レントルフ、オストヘヴェナー)にわたって校訂本が出版された。まず、初版におけるこの著作の評価から各校訂本が出される経緯、その背景などを時

代史的視点を考慮しつつ探った上で、イエスの自己理解としての「神の子」表象を取り上げ、イエスの「メシア」性をめぐる彼の理解をまとめる。ここでは、イエスの語った福音とイエス・キリストを福音とする視点を識別すること、さらにイエスの福音の「殻」と「核」の分別を土台として、神の国が個人の内面世界に到来して現出するというハルナックの理論が分析的に描写される。その際に、伝統的キリスト論と緊張関係にある彼の「神の国」思想の特質を、保守的教会的神学やシュヴァイツァーなどのイエス伝研究における終末論との対論をも概括することで浮き彫りにする。

第四章では、いわゆる自由主義神学陣営に立つハルナックの元でも学んだが、その後、袂を分かち、弁証法神学運動の旗手となったカール・バルト(1886-1968)とハルナックとの関係を取り扱う。この両者は、1923年に『キリスト教世界』誌上で公開書簡の往復による論争を行った。この論争は、学術的神学の代表と目されるハルナックと教会的神学を唱導するバルトとの間の神学的視座の相違によって物別れに終わったとされている。本章では、論争で扱われた種々の主題を分析すると共に、その前触れとしての、1920年のアールハウでの会議で再会した際の両者の主張、また論争の翌年にバルトからハルナックに宛てて出された書簡の内容の分析を通して視座の拡大を図り、それぞれの主張の背景にある神学的時代認識や教派的背景の相違を指摘する。なお、現在までなお未公開に留まっているハルナック宛ての、このバルトの手紙はベルリンに直接赴いて取材されたものである。

終章では、ハルナックの思想の現代的意義を確認する。個人の内面世界に神の国の現臨を認めたハルナックの神の国理解は、20世紀に入ってから二度にわたる世界大戦を経験した社会状況やそもそも神学における「神の国」理論への関心の低下から半ば忘れ去られた状況にあった。しかし、教義史研究者として教義自体の問題性を深く自覚したハルナックの、イエスの人格に深く触れることで営まれるキリスト教的生への関心が表明された神の国理論は、教派や立場を越えて現代においてもなお、多くの示唆を与えるべき課題を表現しており、継続して批判分析の対象であるべきことが指摘される。

本論文は、弁証法神学の影響によって下火になっていたハルナック研究がドイツにおいて復活し、新たな業績が出ていることを踏まえて、ハルナックの神の国思想が現代にも色あせないことを、テキスト分析とともに神学思想が常に課題とすべき時代状況との関係性に言及する中で、説得力ある論述でもって明らかにしている。

よって、本論文は、博士(神学)(同志社大学)の学位を授与するにふさわしいものであると認められる。

総合試験結果の要旨

2009年1月20日

論文題目： アドルフ・フォン・ハルナック『キリスト教の本質』における「神の国」
理解

学位申請者： 加納 和寛

審査委員：

主査： 神学研究科 教授 水谷 誠

副査： 神学研究科 教授 森 孝一

副査： 神学研究科 教授 原 誠

要 旨：

上記審査委員は、2009年1月20日(火)、13時から約2時間にわたって上記学位申請者に対する総合試験を実施した。学位請求論文に対する質疑応答に関しては、申請者が本論文の主題領域について十分な認識を有していることが、的確な応答と説明をとおして確認された。加えて深い神学的知識を有することも認められた。ドイツ語、英語については、本論文で欧文資料、研究文献類が駆使されていることから明らかなように、十分な学力のあることが認められた。

よって、総合試験の結果は合格であると認める。

博士學位論文要旨

論文題目： アドルフ・フォン・ハルナック『キリスト教の本質』における「神の国」理解
氏名： 加納 和寛

要旨：

・本論文の目的と構成

アドルフ・フォン・ハルナック(1851-1930)は、19世紀から20世紀にかけて、ドイツ・プロテスタント自由主義神学を代表する神学者として、またドイツ学术界全体の指導者として幅広い活動をした人物である。それにも関わらず、20世紀中葉以降における彼の評価は決して高いものではなく、その業績が顧慮されることも少なかった。

また、ハルナックがその神学の重要な主題の一つとしていた「神の国」は、そもそも伝統的にキリスト教の重要な主題の一つであるが、この「神の国」の思想も、20世紀の神学に大きな位置を占めた、いわゆる弁証法神学(新正統主義)と呼ばれる神学的潮流からは顧みられることがなかったのである。

しかしながら、20世紀から21世紀への転換期以降、このハルナックと「神の国」それぞれに対する再評価の動きが見られるようになっている。本論文はこのような流れに呼応しつつ、ハルナックの主著『キリスト教の本質』に見られる彼の「神の国」理解を討究する。この討究の足がかりとして、第一章ではハルナックの生涯と同時代のドイツの社会および神学情勢、さらに同時代の「神の国」の思想とを概観し、ハルナックの思想の基盤となっているもの、あるいはその背景を把握しようとした。第二章ではハルナックに大きな刺激を与えたA・リッチェル(1822-1899)の著作『キリスト教綱要』に表れた彼の「神の国」の思想をまず取り扱い、リッチェルの思想がハルナックの思想にどのような影響を与えたかを考察する。一般に、ハルナックはリッチェル学派を代表する神学者の一人とされているが、ハルナックの思想のどこまでがリッチェルからの肯定的継承であり、どこからがハルナックの独自性なのかを見極めるためである。第三章では『キリスト教の本質』を主要テキストとして、ハルナックの「神の国」理解を扱った。ハルナックは自他共に認める歴史神学者であるが、『キリスト教の本質』は純粋な歴史的叙述にとどまらず、ハルナックの思想が直接的に、あるいは間接的に主張されている書物であり、また20世紀初頭に世界規模の影響力を持った神学書である。この『キリスト教の本質』の主題の一つである「神の国」に焦点を当て、ハルナックの思想の中心とは何かを考察する。第四章では、ハルナックおよび「神の国」の思想に対して批判的な態度を示したK・バルト(1886-1968)が、ハルナックとの間で交わした公開往復書簡に見られ

る両者の思想を比較検討することによって、通常、意見のすれ違いに終わったとされるこの往復書簡の意義を改めて問いなおし、ハルナックとバルトの関係および両者の神学的課題について考察を進めている。

・本論文の内容

第一章では、ハルナックの生涯と「神の国」の思想を概観する。ハルナックは教会の伝統的教理や教会的権威に束縛されない、自由な神学研究のあり方を主張し、また実行したが、その背景には当時、教会的権威や世俗的権威である政府の干渉にさらされていた大学神学部の複雑な状況があった。さらには産業革命の達成と相俟って世俗化が急激に進むドイツにおいて、伝統的教理と旧来の封建的なあり方から抜け出せない教会の実態から距離を置かなければ、学術としての神学は時代の要請に応えられないという事情があったのである。

このことをハルナックは神学を歴史学的に取り扱うという方法論によって達成しようとした。彼はその学術的主要著作である『教理史教本』において、初期キリスト教の歴史は「福音のギリシア化」であるとの結論に至った。また、この結論に基づき、いわゆる「使徒信条論争」の中で、使徒信条は歴史的文書であって、現代のキリスト教会の礼拝で用いない方がよいとの意見を発表し、議論を引き起こした。これらの見解は『キリスト教の本質』においてさらに展開されていくことになる。

ところで、19世紀には「神の国」という思想はキリスト教にとって重要な概念であった。それはまず、近代化に伴って出現した都市労働者の劣悪な労働・居住環境、貧困の問題に対して、キリスト教の立場から取り組もうとしたときに、その運動の根拠あるいは目的の一つとして盛んに提唱された。J・ヴィーヒャーン(1808-1881)らは、「神の国」の思想に基づき、大衆の窮乏の救済のための社会運動あるいは政治活動に携わったドイツのキリスト者である。スイスではこのような活動は「宗教社会主義」として、C・F・ブルームハルト(1842-1909)の「神の国」の思想から刺激を受けたH・クッター(1863-1931)、L・ラガーツ(1868-1945)によって展開された。これとは別に、学術的神学では、リッチェルとリッチェル学派、あるいは彼らとは神学傾向の異なる人々においても、「神の国」は中心的主題として展開された。

第二章では、リッチェルとハルナックとを比較検討する。リッチェルは、ナポレオン戦争後、封建社会から市民社会への移行が進んだ19世紀ドイツ後半を代表するプロテスタントの自由主義神学者である。その独自の神学体系はその著作『キリスト教綱要』に簡潔にまとめられている。それによれば、「神の国」とは、真のキリスト教共同体の目的であり、共同体による現在の産物であると明確に定義されている。ただし、この「神の国」と「共同体」とは、現在に現出するものであると同時に、この世に対しては本質的に超越的な存在として規定されている。リッチェルは「神の国」と「共同体」の基礎

を道徳であるとしたが、この道徳とはギリシア哲学的な一般道徳ではなく、神の愛に支えられた完全な道徳である。その規範はイエス・キリストであり、「神の国」は創造から終末まで、一貫して完成に向かっており、イエス・キリストを通じて現出し、共同体において継承され、終末に完成するものとしている。

この「神の国」の思想を、ハルナックは批判的に継承した。リッチェルは「神の国」の枠組みを共同体であるとしたが、ハルナックは個人であるとした。また、個人を「神の国」の受け皿としたことにより、共同体の超越性は解体されることになった。なお、既存の教会権威に対してはリッチェル、ハルナックとも否定的であった。

第三章では、『キリスト教の本質』における「神の国」理解を考察する。『キリスト教の本質』は、出版直後からプロテスタント、ローマ・カトリックを問わず、幅広い議論を引き起こした。反論をした人々は保守的神学の立場に限らず、ハルナックの後の世代の自由主義神学者もいた。同書は 20 世紀を通じてほぼ四半世紀ごとに復刊され、今もその現代的意義が問われ続けている。

「神の国」の思想は、『キリスト教の本質』の中で重要な主題の一つとして扱われている。ハルナックはまず独自のキリスト論によってイエスの位置づけを行った後、これに基づいて「神の国」の本質を規定する。ハルナックによれば、イエスの言動はすべて「神の国の到来」を目的としたものである。この「神の国」は、「福音の人格的実現とその力」であると位置づけられたイエスによって個々人の魂に到来し、個々人の魂が内面的に神と一つになることを意味するという。これこそがイエスの福音の核心であって、「神の国」を時間軸上に設定する終局史的終末論は、この現在の「神の国の到来」に収斂されるのである。ハルナックはこの結論を、イエスの語った福音と、イエス・キリストについての福音とを分離するという方法論をもとに導出した。この方法論は保守的立場から激しく非難され、あるいは宗教史学派からは不満が呈せられた。

第四章では、ハルナックとバルトの論争を取り扱う。1923 年、ハルナックはかつての教え子であるバルトと雑誌上で公開往復書簡の形による討論を行った。この討論の最大の焦点は、神学とは、大学と教会のどちらに軸足を置くべきかというものであったと一般には理解されているが、実際の内容は神学のさまざまな主題に及んでおり、「神の国」の思想もそこに含まれている。もともとハルナックはそれ以前からバルトの神学傾向に危機感を持っており、この往復書簡はその危機感の集大成であったと見ることができる。神学は教会権威から自由な学術的営為であるべきとの信念を持つハルナックと、神学は教会の営みにほかならないとするバルトとの討論は終始かみ合わなかった。その代表的な例は、聖書的な「神の国」の用語にこだわるハルナックに対し、哲学的な「永遠」の概念を持ち出すバルトの主張に見いだすことができる。この討論は物別れに終わったが、ハルナックに対するバルトの敬意は変わらず、バルトは 1 年後にハルナックに宛てて感

謝の手紙を送っている。本論文では、未公刊のこの手紙をバルトによる往復書簡への「最終返答」と位置づけ、両者にとってこの討論は意義深いものであったと結論づける。

終章では、ハルナックの現代的意義を考察する。最初に見たように、ハルナックと「神の国」の思想はこれまで顧慮されることがあまりないものであったが、その今日的意義はますます高まってきている。『キリスト教の本質』出版 100 年およびハルナック生誕 150 年の節目である 2000 年前後に、ハルナック再評価が活発に行われた。また、ハルナックの今日的意義の一つとして、教会と教理に関するハルナックの見解を挙げることができる。ハルナックが神学を大学の学術的営為であるべきとした理由の一つは、教会一致を阻むものは教派的教理(神学)がその主たる要因であると考えたからであった。教会一致運動の停滞が指摘される今日、ハルナックに耳を傾けることは有意義である。また、ハルナックは福音の重要な意義の一つを「父なる神と、人の魂の無限の価値」とした。これは福音の超時代的な核心として再確認されるべき命題と思われるのである。